

女性作曲家 年代順リスト

The New Grove dictionary of music and musicians. 2nd ed. のインデックス Women composers 1800-1900 から資料を所蔵している作曲家23人と、『女性作曲家列伝』(小林緑編著)から4人、合計27人を取り上げました。

新旧の秩序が入り混じる混沌の19世紀。数々の果敢な才女はいたものの存在の影はうすい。
政治イデオロギーが音楽批評にからみ、音楽家の偉大さが慎み深さに邪魔された。
(『女流音楽家の誕生』より)

生年	作曲家名 (国籍)	没年
1804	ファラン <i>Farrenc</i> (フランス)	1875
1805	ヘンゼル <i>Hensel</i> (ドイツ)	1847
1809	メンデルスゾーン, フェーリクス	1847
1809	ブラヘトカ <i>Blahetka</i> (オーストリア)	1885
1810	キンケル <i>Kinkel</i> (ドイツ)	1858
1810	ショパン	1849
1810	シューマン, ローベルト	1856
1813	ワーグナー	1883
1815	ラング <i>Lang</i> (ドイツ)	1880
1819	シューマン, クララ <i>Schumann</i> (ドイツ)	1896
1821	メイヤー <i>Mayer</i> (ドイツ)	1883
1821	ヴィアルド <i>Viardot</i> (フランス)	1910
1822	フランク	1890
1830	バーナード <i>Barnard</i> (イギリス)	1869
1833	ブラームス	1897
1834	ボンダジェフスカ <i>Badarzewska</i> (ポーランド)	1861
1835	サン=サーンス	1921
1839	スミス <i>Smith</i> (イギリス)	1884

音楽はフェリックスにとっては職業となるだろうが、おまえにとっては楽しみof芸術にとどめておくべきもので、決して日々の生活や存在の基盤とはならない。自分の才能を知らしめるという野心はフェリックスには許されるが、所詮、女のものではない。
(『五線譜の薔薇』より、ファニー・ヘンゼル宛の父の手紙)

女性が公の場で活躍することは、女性の本分に悖ることとされた。(中略)もっとも既婚女性でも報酬を得なければ舞台上立つことが許された。そのため、彼女達はしばしば家庭音楽会やサロン・コンサート、あるいは「慈善音楽会」などに無報酬で出演したのである。
(『女性作曲家列伝』クララ・シューマンの項より)

1840	ブロンザルト <i>Bronsart</i> (ドイツ)	1913
1841	アンドレー <i>Andree</i> (スウェーデン)	1929
1844	ロジャース <i>Rogers</i> (アメリカ)	1931
1845	フォーレ	1924
1847	オルメス <i>Holmes</i> (フランス)	1903
1847	バックセル・グロンダール <i>Backer-Grondahl</i> (ノルウェー)	1907
1853	カレーニョ <i>Carreno</i> (ベネズエラ)	1917
1856	ヤノタ <i>Janotta</i> (ポーランド)	1932
1857	シャミナード <i>Chaminade</i> (フランス)	1944
1858	レネス <i>Rennes</i> (オランダ)	1940
1858	スマイス <i>Smyth</i> (イギリス)	1944
1859	クレティアン <i>Chretien</i> (フランス)	1944
1860	マーラー, グスタフ	1911
1862	レーマン <i>Lehmann</i> (イギリス)	1918
1867	ビーチ <i>Beach</i> (アメリカ)	1944
1875	ラヴェル	1937
1879	マーラー, アルマ <i>Mahler</i> (オーストリア)	1964
1892	タイユフェール <i>Tailleferre</i> (フランス)	1983
1892	オネゲル	1955
1892	ミヨー	1974
1893	1918	ブランジェ <i>Boulangier</i> (フランス)

芸術家である女性は自由であるべきです。
束縛されるべきではないのです。
そして夫とは助け合うのであって、
彼の利己主義的な、嫉妬深い非難の
対象になってはいけません。
(『女性作曲家列伝』より
シャミナードのインタビュー)

ひきつづき19世紀——女たちはもう男たちに靈感を
与える妖精アリエルや天才女たちの中から
自分の姿を選び出す必要はなくなったいま、
作品と実践こそが問われ、音楽が生まれる。
(『女流音楽家の誕生』より)

ニューグローヴ世界音楽事典(講談社)に
当該作曲家の項目がある場合に、
紹介記事として一文を引用しました。
「作品」については適宜に選んであります。

＜女性作曲家紹介＞ (アルファベット順)

★*Andree, Elfrida (1841-1929)* エルフリーダ・アンドレー

スウェーデンのオルガニスト、作曲家。最初の音楽の手ほどきを父から受けた後、ストックホルムの王立音楽アカデミーでルドヴィック・ノールマンに作曲を学ぶ。その後、コペンハーゲンでケーゼに師事した。彼女の様式はライプツィヒ楽派と当時のスカンディナヴィア民族主義の理想を反映している。
作品: 交響曲2曲、ピアノ五重奏曲、弦楽四重奏曲、その他の室内楽作品、数多くのオルガン曲。

★*Backer-Grondahl, Agathe (1847-1907)* アガーテ・バックエル・グロンダール

ノルウェーの作曲家、ピアニスト。1865年から67年までベルリンのクラク音楽アカデミーで修学し、71年から72年まで、フィレンツェでビューロに、ワイマールでリストに師事した。主な業績は歌曲(約190曲)とピアノ曲、それに多くのノルウェー民謡の編曲を含む作曲活動にある。彼女の最良の歌曲、例えば歌曲集＜子供の春の日＞や＜アハスヴェールス＞は、ノルウェー・ロマン派歌曲の代表的なレパートリーとなっている。これらの歌曲の長所は、原詩の情緒を巧みに表現し均整のとれた歌いやすい旋律にある。
作品: 歌曲集＜子供の春の日＞、ピアノ曲＜セレナーデ＞＜バラード＞＜夏の歌＞ など

★*Badarzewska, Tekla (1834-1861)* テクラ・ボンダジェフスカ

ポーランドの作曲家。彼女は音楽の訓練を受けていないアマチュアであったが、＜乙女の祈り＞によってその名を知られている。＜乙女の祈り＞は19世紀に流行したサロン音楽作品のたぐいで、芸術的価値は低い。彼女はその後同じような曲を幾つも作曲したが、いずれも成功しなかった。
作品: ＜乙女の第二の祈り＞＜かなえられた祈り＞＜甘き夢＞＜友情のしるし＞ ほか

★*Barnard, Charlotte Alington (1830-1869)* シャーロット・アリントン・バーナード

イギリスの詩人、大衆的なバラッドの作曲家。1857年にロンドンに移った後、W.H.ホームズらにピアノと作曲を学ぶ。晩年になって彼女は自分の作曲技法を改善しようとレッスンを受けており、その結果としてもたらされた繊細さの深まりは＜エリンへ帰れ＞に明白に表れている。この曲は後にアイルランド民謡として扱われるようになった。およそ100曲の感傷的なバラッドや童謡、賛歌を出版し、歌詞もほとんど自作している。
作品: ＜ジャネットの選択＞＜心を返して＞＜エリンへ帰れ＞ ほか

★*Beach, H. H. A., Mrs. (1867-1944)* エイミー・ビーチ

アメリカの作曲家、ピアニスト。1885年にボストン交響楽団との共演でデビューし、天才ピアニストとして活動を始めた。

ビーチは、ボストン楽派のチャドウィック、フットらによって培われた19世紀後期のロマン主義様式の代表的な担い手であった。彼女は折衷主義の作曲家であり、ブラームスとヴァーグナーの音楽、後には後期のマクドウェルとドビュッシーの音楽を取り入れた。彼女の様式は簡潔というよりは精巧で創意に満ち、旋律に対する生来の才能に依拠したものである。

作品:「ゲーリック」交響曲、オペラ〈参事会会議場〉、ピアノ三重奏曲、歌曲〈ああ、愛、1日だけの〉
〈季節は春〉 ほか

★*Blahetka, Leopoldine (1809-1885)* レオポルディネ・ブラヘトカ

オーストリアのピアニスト、作曲家。

作品:ピアノ四重奏曲、ピアノ三重奏曲、ヴァイオリン・ソナタ、ピアノのためのポロネーズ、ノクターン、変奏曲、ワルツ ほか

★*Boulangier, Lili (1893-1918)* リリ・ブランジェ

フランスの作曲家。恵まれた音楽的環境に育つ。フォーレは彼女の家庭の定期的な訪問客であり、姉のナディアは彼女の音楽教育の監督役を果たしていた。1912年にパリ音楽院でコサードとヴィダルに作曲を学び、13年、カンタータ〈ファウストとエレヌ〉で女性として初めてローマ賞を受賞する。すでにその頃までに多数の作品を作曲しており、常に病気がちであったにもかかわらず、その後の残されたわずかな期間にも多くの作品を書き残した。

対位的書法と軽微な半音階性で、彼女の音楽は当時のフランスの主流となった。

作品:声楽曲:詩篇〈深き淵より〉 〈仏教の古い祈り〉 ほか

★*Bronsart, Ingeborg von (1840-1913)* インゲボルグ・フォン・ブロンザルト

スウェーデン系のドイツの作曲家、ピアニスト。

作品:ピアノ協奏曲、ヴァイオリンとピアノのためのロマンス、チェロとピアノのためのノクターン、ピアノのためのエチュード、ノクターン、カイザー・ウィルヘルム・マーチ ほか

★*Carreno, Teresa (1853-1917)* テレーサ・カレーニョ

ベネズエラのピアニスト、作曲家、指揮者、歌手。ベネズエラの作曲家ホセ・カイェターノ・カレーニョの孫。8歳でニューヨークへ留学し、ゴッツョークに師事する。4年後、パリでマティアス、次いでアントーン・ルビンシテーインに学んだ。

弦楽に感心が深かったことから、弦楽四重奏曲ロ短調を作曲したが、他の作品はほとんどがピアノ曲で、華やかな様式のものが多い。

作品:ピアノのための小さなワルツ ほか

★*Chaminade, Cecile (1857-1944)* セシル・シャミナード

フランスのピアニスト、作曲家。ル・クペ、サヴァール、マルシック、ゴダールに師事し、幅広い音楽教育を受ける。8歳で教会音楽を数曲作曲し、18歳で最初の演奏会を開く。

あらゆるジャンルに及ぶ数多くの作品によって注目を浴び、フランスやヨーロッパ各地への演奏旅行を重ねて、これらの作品を演奏した。

シャミナードの作品の多くは真の魅力にあふれ、巧みに書かれてはいるが、サロン音楽の域を出ていない。

作品:フルートとオーケストラのためのコンチェルティーノ、およそ200曲のピアノ曲、およそ125曲の歌曲

★*Chretien, Hedwige (1859-1944)* クレティアン

フランスの作曲家、教育者。

作品:2つのコミック・オペラ、バレエ曲、50の歌曲、50のピアノ曲 ほか

★*Farrenc, Jeanne-Louise Dumont (1804-1875)* ルイーズ・ファラン

フランスの作曲家、ピアニスト、教師、学者。彼女は宮廷芸術家を輩出した家系(女性画家も数人含まれる)に生まれ、ごく幼いときからすぐれた芸術的、音楽的才能を示した。

彼女が才能を最大限に発揮したのは室内楽曲であり、それらは冒険心に欠けるものの、一様に熟達した書法で書かれており、非常に味わい深い、魅力的な作品となっている。

1842年、ルイーズ・ファランはパリ音楽院のピアノ教授に任命され、73年1月1日まで同職にとどまった。

また、夫との共同制作で<ピアニストの宝>を編集し、初期の鍵盤楽器音楽の復活のために尽力した。

女性音楽家がおっぱら演奏家としてしか名を揚げられない社会と、劇場音楽やサロン音楽しか評価されない文化的環境に属しながら、彼女は1870年代のフランス音楽ルネサンスの先駆者、草分け的な学者として多大な成果を収めたといえよう。

作品:交響曲3曲、序曲2曲、ピアノ五重奏曲2曲、ピアノ三重奏曲、ピアノ曲多数 ほか

★*Hensel, Fanny Mendelssohn (1805-1847)* ファニー・メンデルスゾーン・ヘンゼル

ドイツのピアニスト、作曲家。フェーリクス・メンデルスゾーンの姉。弟のフェーリクスと同様に音楽の才能に恵まれていたといわれており、すぐれたピアニストであったことは明らかである。また弟と同じような様式で作曲もしている。しかし、彼女の歴史上の重要性は、フェーリクスの身近にいたことから、彼女の日記と書簡が彼の伝記にとって非常に重要な資料となったところにある。

母レーアが死去してからは、彼女がメンデルスゾーン家の中心人物となり、ベルリンの実家で日曜日の朝の演奏会を主催した。

作品:250以上の歌曲(6つは弟の名前でOp.8,Op.9として出版された)、125以上のピアノ曲

混声四部合唱のための<6つの庭の歌Op.3>、ピアノ三重奏曲Op.11 ほか

★*Holmes, Augusta Mary Anne (1847-1903)* オギュスタ・マリ・アンヌ・オルメス

アイルランド系のフランスの作曲家。11歳のとき、ヴェルサイユ大聖堂のオルガニスト、アンリ・ランベールから正式なレッスンを受けるようになった。その後、クロゼに楽器法のレッスンを受け、1875年には、セザール・フランクの名高い弟子たちの一員に加わった。

彼女の作品の大半は、力強い古典主義的題材か、もしくは神話的題材を基に、その迫力に適した大規模な構想で作られており、歌曲のなかにさえ管弦乐的な概念がしばしば見られる。

作品: オペラ<エロとレアンドル><アスタルテ><湖のランスロ><黒い山>、交響曲、交響詩、合唱作品<アルゴナウテス><祖国のための歎き><勝利のオード>、歌曲 ほか

★*Janotha, Natalia (1856-1932)* ナタリア・ヤノタ

ポーランドのピアニスト、作曲家。ワルシャワで父ユリアン・ヤノタに学んだ後、ベルリンでルードルフとバルギールの指導を受ける。また、ブラームス、クラーク・シューマン、フランツ・ヴェーバー、マルツェリナ・チャルトリスカなどにも学んだ。

ヨーロッパ各地で演奏会を開き、当時最高のピアニストの一人と目された。特にショパンの演奏では高い評価を得た。ショパンのフーガ イ短調を初めて出版した(ライプツィヒ1898)ほか、ショパンに関するポーランド語の書物の補完や翻訳も手掛けた。

およそ400曲のピアノ曲を書いており、これらの作品には明らかにショパンの影響がうかがえる。

★*Kinkel, Johanna (1810-1858)* ヨハンナ・キンケル

ドイツの作曲家、文筆家、ピアニスト、音楽教師、指揮者。

作品: 多数の歌曲集、二重唱曲 ほか

★*Lang, Josephine (1815-1880)* ヨゼフィーネ・ラング

ドイツの作曲家。母はソプラノ歌手レギーナ・ヒッツェルベルガー・ラング、父は宮廷音楽監督テーオバルト・ラングである。母の指導を受け、またメンデルスゾーンに音楽理論を学んだ。

彼女は数冊の歌曲集を出版している。それらは《Allgemeine Musikalische Zeitung》紙で高く評価され、文学的感受性とシューマンの影響を受けた叙情性によって、同時代人から称賛された。

作品: 歌曲集 ほか

★*Lehmann, Liza (1862-1918)* リザ・レーマン

イギリスのソプラノ歌手、作曲家。教師、作曲家、歌曲編曲者としてA.L.のイニシャルで広く知られたアミア・レーマンと、ドイツの画家ルードルフ・レーマンの娘。

異国風のテキストと叙情的な様式が当時の好みに合い、人気を得た。さらに連作歌曲や多くの音楽喜劇を出版し、1910年には自作の歌曲を携えてアメリカに初めての演奏旅行を行い、成功を収める。

作品: 4人の独唱者とピアノのための《ペルシアの庭で》、多数の歌曲集 ほか

★*Mahler, Alma (1879-1964)* アルマ・マーラー

オーストリアの作曲家。作曲をツェムリンスキーに学ぶ。1902年グスタフ・マーラーと結婚。

作品: 歌曲集(5つの歌、4つの歌、5つの頌歌)

★*Mayer, Emilie (1821-1883)* エミリー・メイヤー

ドイツの作曲家、彫刻家。

作品: シンフォニア、序曲、弦楽四重奏曲7曲、ピアノ三重奏曲11曲、ヴァイオリン・ソナタ9曲、チェロ・ソナタ13曲、合唱曲集、歌曲 ほか

★*Rennes, Catharina van (1858-1940)* カタリーナ・ファン・レネス

オランダの作曲家、教育者、歌手。ユトレヒト音楽学校でピアノ、声楽、作曲を学び、1878年からしばらく歌手として活動する。その後アムステルダムでヨハネス・メスハールトに師事し、87年にユトレヒトで自らベルカントという声楽学校を創設した。

ヘンドリカ・ファン・テュッセンブルークと共同で、簡単な旋律に、保守的ではあるが想像力をかきたたせるピアノ伴奏をつけた子供のための歌曲を100曲以上作曲し、新しい分野を開拓している。

作品: <オラニエーナッサウーカンタータ>、合唱曲、歌曲 ほか

★*Rogers, Clara Kathleen (1844-1931)* ロジャース

イギリス生まれのアメリカの歌手、作曲家、教師。

作品: 弦楽四重奏曲、ピアノ曲(ラプソディー、スケルツォ、ロマンス)、ヴァイオリンソナタ、チェロソナタ、およそ100曲の歌曲 ほか

★*Schumann, Clara (1819-1896)* クラーラ・シューマン

ドイツのピアニスト、作曲家。フリードリヒ・ヴィークとその妻マリアンネの長女として生まれ、5歳から父にピアノを学ぶ。1840年ローベルト・シューマンと結婚。

Op.13の3つの歌曲と、Op.13の6つの歌曲は、繊細なニュアンスにあふれた静謐な作品。ピアノ三重奏曲Op.17では音楽の細部が全体の脈絡のなかに位置づけられており、高度に凝集した和声主体の構成に対して、

くつきりと際立たせられている。53年の夏に生まれた最後の作品群は驚くほどの独創性を示している。とりわけOp.23の歌曲では、旋律、リズム、和声における独特のゆらめきが、作品にある種の趣を添えている。

創造的才能に恵まれ、また作曲以外の音楽活動では圧倒的な成功を収めていたにもかかわらず、クラーラ・シューマンは作曲家として本格的な野心を持つことは決してなかった。19世紀のドイツは、女性がこうした野心を持つことに対してはなお厳しく冷淡であった。

作品: ピアノ協奏曲Op.7、ピアノ三重奏曲Op.17、ヴァイオリンとピアノのための3つのロマンス、多数のピアノ曲、歌曲

★*Smith, Alice Mary (1839-1884)* アリス・メアリー・スミス

イギリスの作曲家。スタンデイル・ベネットとG.A.マクファーレンに師事する。1867年11月にフィルハーモニー協会の女性職業連盟の会員に推挙され、84年にはロイヤル音楽アカデミーの名誉会員に選ばれた。

スミスは、大作、小品の両方に多数の作品を残した。

作品: 交響曲2曲、カンタータ5曲、序曲4曲、弦楽四重奏曲3曲、ピアノ四重奏曲4曲、クラリネット協奏曲1曲 ほか

★*Smyth, Ethel (1858-1944)* エセル・スマイス

イギリスの作曲家。1877年にライプツィヒ音楽院に入学。ライプツィヒで書かれた初期の室内楽の小品は評判となり、同地で出会ったブラームス、グリーグ、チャイコフスキイ、ドヴォルジャーク、クララ・シューマン、ヨアヒムのだれもが彼女を有望で真摯な作曲家と認めてくれた。

スマイスが最大の成功を収めるのはオペラの分野においてであった。

スマイスの音楽は独特で、進歩的な基準で評価されねばならない。しかし、その様式は折衷的で、一定の独自の表現をとることは決してなかった。一つの作品のなかで、実験的で斬新な和声語法と慣用的な語法が背中合わせになっており、巧みな着想のテーマとごく普通に作られたテーマとが方を並べていることもある。

それにもかかわらず、全体からは力強さ、壮大さ、強い誠実さが感じられる。

作品: オペラ<ファンタジオ><森><海難救助法><あでやかな宴><英仏協商>
ヴァイオリン、ホルン、オーケストラのための協奏曲、交響曲<牢獄> ほか

★*Tailleferre, Germaine (1892-1983)* ジェルメーン・タイユフェール

フランスの作曲家。音楽を生涯の仕事とすることに両親から強く反対されたが、1904年、パリ音楽院に入学する。H.ダリエの指導での和声とソルフェージュ、G.コサードの指導での対位法、エステイルの指導での伴奏法で、それぞれ1等賞を獲得した。同音楽院でオリック、オネゲル、ミヨーに出会い、彼らからサティに紹介される。1920年、このグループが「六人組」となる。

タイユフェールの自然さ、新鮮味、幻想性は、サティと六人組本来の美学とを結びつける絆として存続している。コクトーは彼女を「耳で聴くマリ・ロランサン」と評したが、彼女の音楽は常に優雅で女性的であり、その特質は第1ヴァイオリン・ソナタ、バレエ音楽<鳥商人>、輝かしい管弦楽の<序曲>などに十分に示されている。

作品: オペラ、バレエ、付随音楽、オーケストラ曲 など多数

★*Viardot-Garcia, Pauline (1821-1910)* ポリーヌ・ヴィアルド・ガルシーア

スペイン系フランスのメゾソプラノ歌手、作曲家、声楽教師。マヌエル・ガルシーアの末娘。11歳のとき父親が他界したため、母親から声楽の訓練を受けたが、父親の影響が大きい。ピアノをマイセンベルクとリストに師事し、すぐれたピアニストに成長する。また、レイハのもとで作曲を学んだ。40年に著名な作家ルイ・ヴィアルドと結婚。二人の新居は作家や音楽家、芸術家の社交の場となり、当時のパリで最も有名なサークルの一つとなる。彼女が作曲したオペレッタのうち、数曲はツルゲーネフの詞による。また、ショパンのマズルカを声楽用に編曲し、ショパンから賞賛を浴びた。さらに数多くの歌曲を出版したが、そのなかの数曲はロシア語の歌詞につけたものである。

作品: 喜歌劇<リンドロ>、カンタータ<バッカス祭>、弦楽四重奏曲1曲、歌曲多数 ほか